
夜行列車

広瀬もりの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜行列車

【Nコード】

N0532U

【作者名】

広瀬もりの

【あらすじ】

流れる窓灯りはやがて星になる
線路沿いの道を歩く帰り道、
思い出す「あなた」のこと。

サイト「夏色図鑑」に掲載中の短編です。

この街にひとつしかないお風呂屋さんに行くのが、あなたの数少ない娯楽のひとつだった。

洗面器に石鹸とシャンプーとお風呂スポンジを入れて。バスタオルとタオルを肩に掛けて。サンダルの音を響かせながら、夜道を歩く。夏は涼しいお散歩だったけど、冬は部屋に帰り着く頃にはもう凍えていた。

カラン、カラン。

小さくなったあなたの石鹸がケースの中で音を立てる。湯気の上がる指先。たくさんの星くずの中から、たくさんの星座を覚えてくれた。

「神田川ごっこ」…そんな風に言っていた。もちろん、私たちはリアルタイムでかくや姫の「神田川」を聞いていない。でも、南こうせつさんがTVとかで唄っているのを聞いていて、あのもの悲しげなメロディーにノスタルジックな憧れを抱いていた。

貧しくて、贅沢なんて出来なくて。でも、ふたりで身体を寄せ合っていたら温かい。そんなままとみたいな関係が、続けられるものなのだろうか。

「神田川のふたりは、…結局別れたんだよね？」

いつだったかゼミの友人がぼつんとそんな風に言った。何やかんや言っても、私たちはまだ「恋愛」に対して憧れを抱く年頃だった。毎週、連ドラを観ては、主人公がどうしたら幸せになれるかと気をもんで、TVの前で一緒に泣いたりして。どんなに道のりが険しくても、それでもハッピーエンドになる結末が好きだった。

好きなのに、大好きなのに。どうして別れるのだろう。私には理解出来なかった。相手のことが嫌いになったなら分かる。人の心は変わっていくものだ。その変化に涙することもあるだろう。

…でも、愛情さえあれば。どんな山も乗り越えられる。そう信じ

てた。

あなたのバイトが終わるのを待って出かけるので、いつでもお風呂屋さんの看板ギリギリだった。モップを持ったおじさんが磨りガラスの向こうに見えて、慌てたことも何度かある。大慌てで服を着て外に出た。息が白くなって、その向こうであなたが笑っていた。

線路沿いの道を歩くと、決まってそこを西に向かつて走っていく列車が通り過ぎた。在来線と少し色の違う車体。最初は何だろうと思った。4人がけの座席に、乗客がまばらに座っている。みんな眠っているみたいだった。

それは、あなたの生まれた街に戻る夜行列車だと、いつか教えてくれた。東京を12時近くに出て、夜通し走る急行列車。寝台車ではなく、座席指定。座ったまんまで一晩過ごすのはかなり辛いと言っていた。過去に数回使ったことがあるみたいだった。

窓の明かりは一本のラインになって、遠く遠く流れていく。カーブを曲がって、カタカタと揺れながら、手に届かないところまで行ってしまう。あなたの視線がそれをずっと追っていくのが、何だか悲しくて、急にひとりぼっちになった気がした。

上着の袖をぎゅっと掴むと、あなたが振り返る。そして、優しい笑顔で私を見た。

「…戻りたいの？」

泣きたい気分で、そう訊ねる。だって、そうだよ。ふるさとに戻りたくない人はいない。それなのにあなたはもう何年も帰ってない。電車に乗っても飛行機でも、帰れる。新幹線だったら、ちよつとうたた寝していれば、到着するだろう。そんな距離なのに。

「うつん、戻らない」

そう言って、あなたは私の肩を抱いた。

あなたの家は老舗の旅館をいくつも経営している資産家で、もちろんその運営はそれぞれの店がやるから、上に立って管理するだけで、大金が転がり込む。そんな恵まれた実家を持っている人だった。

だのに、跡継ぎの長男だったあなたは、その輝かしい未来への選
ばれたレールを降りてしまった。

「映画監督になりたい」…このデジタル・CGの時代にそんなこと
を言い出して、家を飛び出した。勘当という奴なんだという。働き
ながら、就職に有利な専門学校に通い、たまに撮影現場に転がり込
んで、下っ端の仕事をしたりもしていた。

レンタルビデオ店のバイトで、私たちは知り合った。私は昼間の
シフトで、あなたは夜のシフト。時給は安かったけど、好きな映像
の世界に触れていられるからいいと言っていた。顔を合わせている
うちに何となく仲良くなり、その店が潰れてバイト仲間じゃなくな
る頃、私たちはつきあい始めた。私はそのころ地元の大学に通って
いた。

私の両親はアバウトだったから、娘がどこに泊まりに行ってもう
るさく言わなかった。そんなわけで、ちよくちよくあなたの部屋に
入り浸り、そのたびに「神田川ごっこ」を楽しんでいた。

「神田川」のふたりは、それこそ爪に火をともしような生活をし
ていたのかも知れない。3畳一間の下宿なんて想像付かない。あな
たの部屋は1DKでちゃんとキッチンもユニットバスも付いていた。
それなのに「神田川ごっこ」をしたのは、趣味以外のなものでも
ないのだ。

あなたの夢を隣で聞いている時間が楽しかった。少し現実離れし
て危なっかしく見えるのは、苦労したことのない幼年時代を過ごし
たせいなのかも知れない。浪費家ではなかったが、儉約家でもなか
った。

でも…大丈夫。私たちは壊れたりしない。お互いの間にちゃんと
愛情があるんだから。どんなことにも負けない強い絆がある。そう
信じていた。

暑い夏の日。

あなたは友達から借りたというハンディービデオを持って、私を

公園に連れ出した。そして蝉時雨の中に私を立たせて、一人きりの撮影会を行った。

「…ほら、振り向いて。笑って見せて」

安っぽいカメラマンみたいな台詞で、私に指示する。でも、私は上手に笑顔を作ることが出来なかった。大きな麦わら帽子、白いワンピース…夏草の中で、日差しがまぶしかった。でもそれよりもあなたの笑顔がまぶしくて…どうしても届かないもののように思えた。数時間の後。あなたは「いいものが撮れた」と笑った。これを専用のケーブルで繋いでTVにセットすれば、すぐに再生出来る。でも、私はその映像を見ることはなかった。

「ちよつと、行ってくるね」

そう言つて、白い建物の中に消えた。そして、あなたは二度と戻つてこなかった。

スーパーの買い物袋を下げて、家路を急ぐ。

今日は1時間の残業があつたので、少し遅くなった。とつぷりと日の暮れた風景に白い月が細く漂う。線路沿いの道を歩いていたら、通勤列車が通り過ぎる。ぎゅうぎゅうのすし詰めの中。でもその窓も遠ざかれば、あの日のように一本のラインになる。そして…坂を上つて…何だか、銀河の中まで走つていきそうだ。

きつとあなたも乗つたのだ。あの、宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」のように、死者を乗せた汽車に。そして、今も宇宙のどこかを走っているかも知れない。

治る病気じゃなかったんだという。もしも、もっと早い頃にきちんとした設備のある病院に入院すれば、それなりの延命措置は取つて貰えた。でも…あなたはそれを望まなかった。

最後まで、人間らしく生きていきたい。そう言っていたのだという。私は何も知らなかった。あなたのご両親は何もかもを承知で、あなたの我が儘を聞いてくれたんだね。

入院した時。もう手の施しようがないほど、症状が進んでいたと

いう。でも、あなたは最後まで気丈に頑張った。まさか、ベットに束縛されて3日で逝ってしまうとは思わなかったけど。残された私は泣いて泣いて、もう全ての水分が身体から抜けてしまうほど、泣きまくった。下を向くと、意識しなくても涙が出てくる、そんな日常だった。

…すぐに、そこに行けると思ったのに。

どうしたんだろうね、私はまだ生きてる。あなたの残したあの夏は一緒に棺に納めたけど、私はまだこうして生活してる。こんな私と幸せになりたいという人と巡り会って、そして今、新しい命の誕生を心待ちにして過ごしてる。

彼は一番じゃなくてもいいよと言ってくれた。今この時と一緒に生きることが出来るなら…ただそれだけでいいからって。そんなじや申し訳ないんだけど、でも…いいよね。

あなたと一緒に、あの列車に乗ることは出来なかった。ふたりでどこまでも行こうと思ったのに、あなたは勝手に私を置いて行ってしまった。そんな意地悪をするんだもん、少しくらい、困らせてもいいと思う。待っていてね、全てが終わったら、命の終わりに必ずそこに行くから。

あの夜行列車は、もう走っていない。時代の流れの中で時刻表から姿を消した。でも、私の心の中で、今も鮮やかに窓灯りのラインを描き、遠く星の間を抜けていく。あなたの辿った夢と共に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0532u/>

夜行列車

2011年6月13日11時10分発行